

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

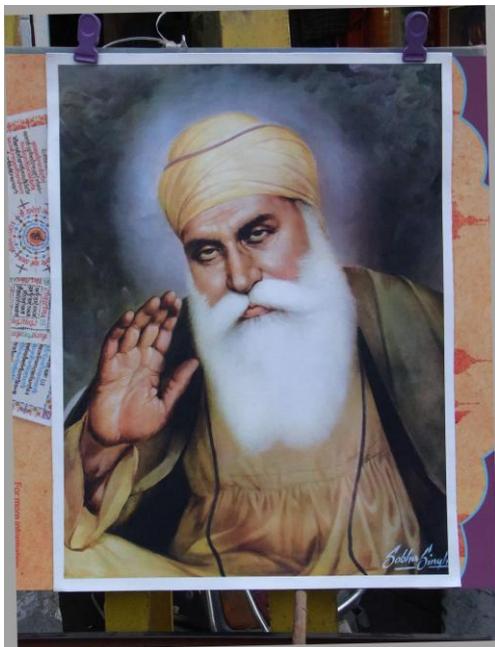
平成 23 年度派遣報告書

—パンジャービー語、ローズ・マウント言語研究所、インド共和国、H23. 7. 31-H23. 10. 31)—

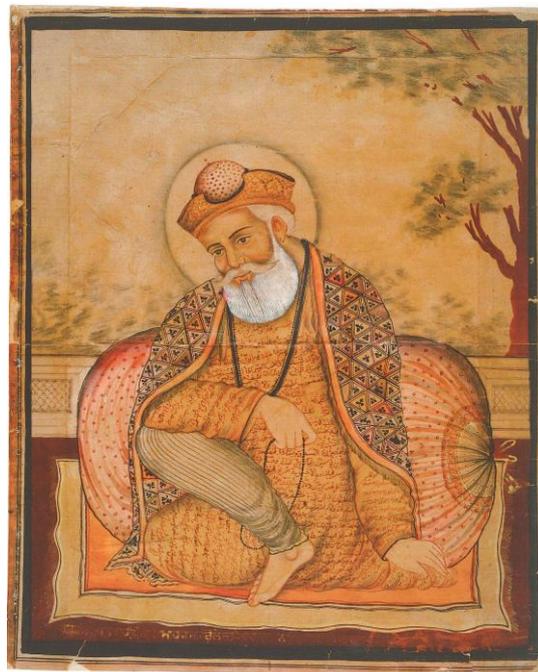
平成22年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程2回生
池田 篤史

自身の研究テーマについて

シーク教では15世紀末にパンジャブ地方で誕生した当初から、偶像崇拜や呪物崇拜が教義の中で禁止されていたので、肖像画にグルが描かれることは稀であった。絶対存在はニランカール[Nirankar](見えない、形のない)であるという理念は、スィック教の聖典『アディ・グラント[Adi Grand]』の中で繰り返される「ヒンドゥー教徒の儀礼を行うことも、ムスリムの祈祷文句を捧げることなく、心の中にいる形のない神に私(グル・ナーナク)は頭を垂れる。・・・(なぜならば、)私はヒンドゥー教徒でもムスリムでもない(からである)。」という詩句に表されている[Gell 1996:54]。特に創始者であると同時に初代のグルでもあるナーナクに関しては、20世紀以前の作例がほとんど残っていない。[B.N. Goswamy 2006:30]。それにも関わらず、現代のシーク教徒の家屋や寺院などの壁には、必ずと言ってよいほどにナーナクの肖像画が架けられている。



挿図1:《祝福するグル・ナーナク》;ソバ・シン作、1968年、アムリットサル



挿図2:《詩文のロープを纏うグル・ナーナク》;イマーム・バクシュ工房作か、ラホール、19世紀後半

研修言語の概要

本研究では、シーク教の初代グルであるナーナクの肖像画に関して、その原初的作例の図像及び形

式的特徴と鑑賞方法の歴史を検討し、現在最も流通している印刷物への変遷を明らかにする。そしてパンジャブ地方における政治運動や社会変容との関係を問うことによって、現代のシーク教徒共同体の中でナーナク及び彼の肖像画が果たす役割について考察する。

パンジャービー語はインドとパキスタンにまたがるパンジャブ地方の言語であり、話者数は世界で17番目に多い6100万人である。パンジャービー語はインドのパンジャブ州の公用語およびデリーの第二公用語になっているが、パキスタンのパンジャブ州では公用語とはなっていない。パキスタンではシャー・ムキー体というナスタアリーク体を変えたアラビア文字を用い、インドではシャールダー文字の系統のグルムキー文字を用いる。

語学研修の内容について

研修はインド北部のウッタラーカンド州の州都デヘラードゥーンにあるローズ・マウント・インスティテュートで行った。まず、最初の一ヶ月程度は教材を中心とした座学を行った。そこでは主に文法事項を押さえ、基本語彙や会話表現を身につけ、現地での生活に順応することに専念した。インドのパンジャービー語は35文字が7行5列に整然と並べられた表があり、初めの3文字が母音に関するものである。縦4列目では例外的に2通りの読み方をしているものがある。ヒンディー語やベンガル語やシンハラ語では、この部分が1通りの読み方で有声音の有気音になっているが、総じて文法的にはヒンディー語と大差ない。そこで良質の教材が豊富なヒンディー語の文法書を参考にしながら、パンジャービー語を学習に応用した。その後の一ヶ月はspeakingやlisteningの学習に重点を移し、より実践的な状況



挿図3: 派遣者とネイティブ講師インデラジット・シン先生

を想定した訓練を行った。パンジャービー語は語

尾に鼻音が多く含まれ、非常に音楽性に富んでいる。パンジャブ地方の民謡及び舞踊であるバングラ（現地読みではパングラ）の他にもパンジャービー語による歌謡曲や映画の制作も盛んなので、教材以外の学習手段として活用した。最後の一ヶ月は高度なreadingテキストの演習を通じて、文献購読に必要なスキルを身につけるよう心掛けた。また、現地の人々とのコミュニケーションを通じて会話力の向上を図り、この期間にワードバンクや報告書等の作成を行った。

研修期間中の印象に残った体験・経験

研修期間中には、デヘラードゥーンのエリート都市としての姿も垣間見えた。この山間の中都市は夏季の気温が低地ほどには上がらないため、大都市から多くの良家の子女が訪れ、学校付属の寮で生活をしている。その結果、デヘラードゥーンは辺境地域でありながら数多くの高等教育機関や研究機関を持つに至っている。派遣者の友人の中にも、大学院を修了後にデリーやムンバイなどの大都市に移住して職を得たいと考えている人物がいた。それがウッタール・プラデーシュ州がインド全体で最も多くの移住者を送り出している理由なのだと思います。図らずも常々抱いていた疑問を解決できたのは予想外の収穫であった。また、デヘラードゥーンから少し高い土地にあるマナーリーを訪れた際には、低地ではあまり目にすることのできないチベット人たちに会うことができた。ヒマラヤ一帯ではイスラームの影響はあまり見られず、亜大陸の中でも独特の文化が存在しているという印象を受けた。

目標の達成度や反省点について

研修期間中は大きな事件もなく、概して順調な日々を過ごすことができた。助成を受けなければ訪れることのなかった都市を知り、出会うことのなかった人々の話を聞いたのは今後の研究に大いに活きるであろう。しかし、派遣の前にパンジャービー語の基本語彙や基礎文法を身につけておけば、研修や調査がもっと効率的に行うことができたかもしれない。現地での生活への適応やパンジャービー語の講師と関係を築くのに手間取り、結果として研修期間を十分に活かすことができなかった点が悔

やまれる。この反省を糧に、今後も語学学習を継続して行い、地域研究者としての最低限の素養である現地語の運用能力を磨き、自身の研究をより豊かなものにしたいと思う。